

景観まちづくりの推進に地域外支援者が果たす意義と課題に関する一考察 —和歌山県海南市黒江の「黒江の町並みを活かした景観づくりサポーター制度」を事例に—

竹 田 茉 耶

(島根県立大学短期大学部総合文化学科 非常勤講師)

A study on the significance and effect of Outside Supporters for Community Development through
Landscape Design
- Case study of Supporter System in Kuroe, Kainan-City, Wakayama Prefecture -

Maya TAKEDA

キーワード：景観まちづくり Community Development Through Landscape Design
地域外支援者 Outside Supporters
サポーター制度 Supporter System
黒江 Kuroe

1. はじめに

重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区とする）をはじめ、それ以外の建造物を含め、今日まで継承されてきた歴史的建造物について、これを保全しつつも観光資源として活かし、地域振興を図る取り組みが行われるようになって久しい。

しかしながらこうした取り組みの反面、人口減少や高齢化が著しい地域では、空き家化による荒廃、歴史的建造物の取り壊しや増改築が進んでいる。とくに重伝建地区には指定されていない地域では、重伝建地区ほどの法的拘束力がなく、財政的支援も脆弱である。地域の担い手不足や高齢化に加えて、こうした事情が、歴史的町並みの解体を進行させ、町並みとして保全することをさらに困難にしていると考えられる。

こうした状況に抗し、人口減少や高齢化が進展す

る地域において、歴史的建造物の保全・活用を目的とした景観まちづくりを進めていくためには、地域住民と行政との協働はもちろんのこと、同時に、新規居住者や地域外支援者を増やす取り組みが必要である。

そこで、本稿では、「サポーター制度」（詳細は、後述）によって、地域外支援者であるサポーター⁽¹⁾の協力を得ながら景観まちづくりに取り組んでいる和歌山県海南市黒江を事例に、地域外支援者が景観まちづくりに果たす意義と課題について考察する。

具体的には、筆者が実施したアンケートやヒアリングにもとづき、黒江の景観まちづくりの展開の整理と現状分析、ならびに黒江のまちづくりに対するサポーターの意識を明らかにする。

2. 本研究の位置づけ

当該地域の居住者以外の人びとが、地域づくりの担い手となる可能性については、たとえば、敷田¹⁾や森重^{3) 4) 5)}らの議論がある。

これらの議論は、地域外部の人びとを当該地域の担い手に組み入れる動きについては、これを警戒する観点から言及している。たとえば、森重⁶⁾は、地域外関係者が当該地域において活動を展開する際には、その活動が地域社会に予期せぬ影響を与える可能性があるため、地域側には、これを制御する目利きの能力が求められるとする。また、敷田⁷⁾は、地域の主体性を無視して、地域外アクターによって一方的に改革が進められた場合、それは従来の外来型開発と同じものになると指摘する。

しかし一方で、地域社会が担い手不足を課題とする中で、外部からそこに主体として参画しようとする人びとが存在することは、地域社会の担い手の新しいかたちが形成される可能性も孕んでいると考えられる。

地域外支援者とまちづくりの関係を正面から論じた研究の蓄積が少ない中で、本研究は、黒江における景観まちづくりの取り組みを事例に、地域外支援者およびこれを包摂したまちづくりのための住民組織が景観まちづくりの推進に果たす意義および課題について考察しようとするものである。

3. 対象地の概要および研究方法

1) 黒江の概要

黒江は、和歌山県海南市の臨海部に位置する。本研究で対象とするのは、「黒江の町並みを活かした景観づくり協定」(以下、協定とする)の締結区域である(図1)。区域の世帯数は93世帯、人口は224人である(2016年3月時点)⁽²⁾。

区域の中心を通る延長230m幅約12mの川端通りは、大正時代末期に埋め立てられるまでは運河として物品の輸送機能を担っており、運河の両岸には漆器問屋が、その裏通りには漆器職人の仕事場兼住宅が軒を連ねていた。

1970年頃から製造業者の多くが、黒江の北東に位置する岡田地区につくられた漆器団地に移転したも

の、川端通りを挟んで北側の西ノ浜地区、南側の南ノ浜地区の一部に往時の面影を残す町家が残る⁽³⁾。

現在、区域内には、紀州漆器の展示・販売を行う紀州漆器伝統産業会館、数件の漆器製品の販売店、築150年を超える町家を活用したカフェ、ガラス細工工房、日本酒の製造会社が運営する茶屋と歴史資料館といった集客施設があり、地域外からの一定の集客を実現している。

なかでも、川端通りで開催される下駄市や漆器まつりといった漆器産業が栄えた地ならではの催し物は数万人の人出でにぎわう。また、毎年2～3月には、紀州海南ひなめぐりが開催されるなど、黒江らしい町並み景観を活かした観光地域づくりが進められている。

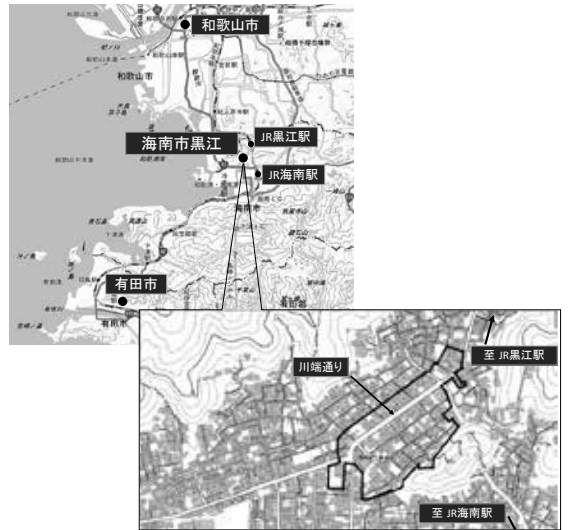


図1 黒江の位置と協定区域(右図の黒線枠内)



写真1 築150年を超える町家を利用したカフェとくろめ鉢

2) 研究方法

まずは、2011年に協定が締結されてから現在までのまちづくりの経過について、筆者の参与観察、協定の運営協議会会長等へのヒアリング、協議会のブログ⁸⁾の内容を中心に整理する。併せて、景観まちづくりに対する住民意識について、筆者が実施した住民アンケートから明らかにする。

続いて、サポーターに対して、同じく筆者が実施したアンケートにもとづいて、①サポーターに登録したきっかけと動機、②自身と黒江との関わり、③黒江の町並みとまちづくりに対する考えを明らかにする。以上の内容をふまえ、サポーターが黒江の景観まちづくりに果たす意義および課題について考察する。

住民アンケートは2016年3月7日～14日に実施した。対象者は協定区域の全世帯である。回答は、世帯主もしくは世帯主に代わる方に依頼した。訪問配布、留置き自記式、訪問回収（一部郵送回収）による。86世帯に配布し76世帯から有効回答を得た（回収率88.3%）。サポーターへのアンケートは、2012年10月15日～11月5日に実施した。対象は、調査実施当時、サポーターに登録していた63名である。郵送配布、郵送回収による。63名に配布し34名から回答を得た（回収率53.9%）。

4. 黒江の景観まちづくりの展開と現状分析と考察

1) 住民主導のまちづくりの始まり

「黒江の町並みを活かした景観づくり協定」は「歴史と伝統のある紀州漆器のあるまちである海南市黒江の町並みを保全していくこと」を目的に、黒江地区の住民間で取り結ばれた。協定の締結日は2011年12月である。同協定は、以下の点から、住民主導の景観まちづくりとして位置づけられる。

第1に、協定を締結する動きは、「高齢化と人口減少が進み、空き家や、家屋の取り壊しによる空き地が増え、往時の面影を残す町並みが消え行く様子を目の当たりにし、何とかこの町並みを残したい」⁽⁴⁾という南の浜自治会長（当時）であった協定運営協議会の初代会長の思いがきっかけとなって始まった。各戸を1ヵ月半かけて回り、住民に理解と

賛同を求めた。79世帯の同意を得て、川端通りを挟んで北側の西の浜地区の一部と、南側の南の浜地区が協定区域となった。なお、同協定は住民参画の景観づくりを促す「わかやま景観づくり協定」⁽⁵⁾第1号の認定を受けている。

第2に、黒江において、歴史的景観を活かしたまちづくりの動きが協定の締結以前に皆無だったわけではない。1990年代後半、行政によって町並み整備事業が企てられたが、これが結実しなかった歴史がある。海南市の長期総合計画においてまちづくりが主要なテーマと位置づけられ、リーディングエリアとして黒江が位置づけられたのは1996年のことである⁹⁾。翌年の1997年には海南市黒江町並み整備事業基本構想が策定され、グループインタビュー形式で町並み整備事業に関する住民の意識調査が実施された¹⁰⁾。暗渠となっていた川端通りをもう一度堀川として復活させ、観光地として整備するという壮大な構想が打ち立てられた。

しかしながら、この事業計画は実現するに至らず、歴史的景観はこの間、徐々に失われていった。同事業が結実しなかった背景には、構想が地域の環境を大きく変えてしまうものであったため、住民の賛同が得られなかったという事情がある⁽⁶⁾。この事業が計画される以前から、一部の住民らは黒江の歴史的建造物を保全するための行政的支援の必要性を訴えていた。しかしながら、当時は、行政がこうした声に向き合うことがなかったため、いまさらもう遅いという思いを抱く住民もいたようである⁽⁷⁾。

以上のようにそれまでのような行政主導ではなく、住民（＝自治会長）発意の景観まちづくりに他の住民が協定に賛同するかたちで応えたという点で、協定の締結は、黒江における住民主導の景観まちづくりの第一歩となったといえる。

2) 景観づくりサポーター制度

本協定は、住民主導の動きであることに加え「黒江の町並みを活かした景観づくりサポーター制度」（以下、サポーター制度とする）を設けている点の特徴である。

この制度は、少子化や高齢化が進んでいく中で、

地元住民だけでは、町並みの崩壊を食い止めることが困難であるとの認識の下で、実際に行動できるまちづくりの担い手を確保するため、また、黒江のファンだと言ってくれる人たちがおり、そうした人たちに担い手として一緒に取り組んでもらうための手段として取り入れられた⁽⁸⁾。

サポーター制度への登録者はもっとも多いときには80人を超えたが、その後減少し現在では約40名が登録している。

登録者数の変動はさておき、地域外部の人びとを景観まちづくりの担い手に取り込むサポーター制度のしくみは、景観まちづくりに取り組む他地域から高い関心を集めた。これまでに、雑賀崎・田野・和歌浦地区景観まちづくりを考える市民の会や高山市景観町並み保存連合会が黒江を視察に訪れた。

3) この間の活動経過

協定では、景観づくりを進めるにあたって、①自主ルール「黒江の町並み景観形成基準」による町並みの保全、②清掃美化活動や空き家等の管理・活用などの相互協力、③黒江を応援する区域外の支援者を「黒江の町並みを活かした景観づくりサポーター」として登録し、協同の景観づくりを実施、④運営協議会を設置し、協定の円滑な運営を実施する、という4点を具体的な活動項目としている。

協定の推進機関である運営協議会は15名の地域住民で構成されており⁽⁹⁾、原則月1回定例会が開催されている。一部のサポーターは、運営協議会にオブザーバーとして出席している。

協議会はこの間漆の攪拌に使われていた木桶「くろめ鉢」(写真1)の家々の軒先への設置や、「おもてなしベンチ」の設置、協定の区域内ではないものの、現在は使用されていない漆問屋の倉庫を活用したクラシック・クリスマスコンサートの開催など、黒江らしい景観づくりや黒江らしい資源を活かした催しを行ってきた。クリスマスコンサートでは100枚のチケットが販売されたが即完売となり、区域外から多くの人々が訪れた。

くろめ鉢は協議会が協定区域の住民に対して、自宅前に設置してくれる人を募ったが、除々に手を挙

げる住民が増えて、現在は区域内の19カ所に設置されている。これらの活動はいずれも、高齢者の多い地元住民だけでは円滑かつ迅速な実施が難しく、相対的に年齢層が若くかつアクティブなサポーターの存在は大きな手助けとなっている。

その他にも協議会は、黒江に関する写真や資料をデジタルデータとして保存し、活用を図る「黒江アーカイブプロジェクト」を企画し、漆問屋を営んでいた古老を語り部に招いて、地元住民やサポーターで黒江の歴史を共有するなどの活動を行ってきた。

空き家の管理・活用については、現在、活用可能性のある物件数軒について、持ち主との交渉を進めている最中である。なお、活動の詳細については、[表4]にまとめた。

以上のように、協議会はくろめ鉢の設置活動や地元の古老による歴史勉強会の開催などを通じて、地元住民が景観まちづくりへの関心や関わりを高められるよう活動に取り組んできた。さらに、サポーターという助っ人を得たことで、漆器産業にちなんだ資源を活用し集客を図るなど、町並みを保全することと同時にそれらを活かす活動にも精力的に取り組んできた。

ただ、具体的な活動の①自主ルール「黒江の町並みを景観形成基準」による町並みの保全については、個々の町家や住宅は個人の私有財産であり、また、協定自体が法的拘束力を伴わないこともあり、自主ルールに反して建物の取り壊しや改築が行われたり、空き家化が進むなど、歴史的な景観の保全・修景という点では必ずしも効力を発揮していないのが現状である。

4) 景観まちづくりに対する住民意識

以上のように、自主ルールの運用に関しては区域の住民の間に浸透していないのが実情であるが、景観まちづくりそのものに対する住民の意識実態はどうであるのか。筆者が区域住民を対象に実施したアンケートをもとに明らかにする。

アンケートは協定が締結されてから5年目となる2016年3月に実施した。回答者の性別および年齢は[表1]のとおりである。70代がもっとも多い。70

代以上が全体の77.7%を占めていることから高齢化が著しい区域であることがわかる。

表1 回答者の性別および年齢

	39歳以下	40代	50代	60代	70代	80代	90代	無回答	計
男性	1	3	5	2	14	4	1	3	33
	3.1%	9.4%	15.6%	6.3%	40.6%	12.5%	3.1%	9.4%	100.0%
女性	0	0	0	4	10	5	3	1	23
	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	45.0%	20.0%	10.0%	5.0%	100.0%
無回答	0	0	0	2	1	2	0	15	20
	0.0%	0.0%	0.0%	11.8%	5.9%	11.8%	0.0%	70.6%	100.0%
計	1	3	5	8	25	11	4	19	76
	1.4%	4.3%	7.2%	11.8%	33.3%	14.5%	4.3%	23.2%	100.0%

世帯人員および居住年数は「表2」のとおりである。世帯人員は単身がもっとも多い。居住年数は50年以上が半数を超える。

表2 回答世帯の世帯人員および居住年数

世帯人員	居住年数						計
	10年未満	20年未満	30年未満	40年未満	50年未満	50年以上	
単身	1	0	2	3	0	19	27
2人	1	0	2	0	2	9	15
3人	1	1	0	0	2	4	8
4人	0	1	2	0	1	2	7
5人以上	0	1	1	0	0	2	5
NA	1	0	0	4	1	4	14
計	4	3	7	7	6	40	76
	5.3%	3.9%	9.2%	9.2%	7.9%	52.6%	11.8%

まず、協定が締結された5年前と比べて、町並みに対する関心は変化したかという質問に対しては、「非常に関心が高まった」「多少関心が高まった」とする回答が31.6%、「あまり変わらない」「まったく変わらない」が67.1%となっている[図2]。

31.6%という数字をどう見るかは評価の分かれるところであるが、この間の動き・状況の変化が住民の変化に対して一定のインパクトを与えたことは明白である。

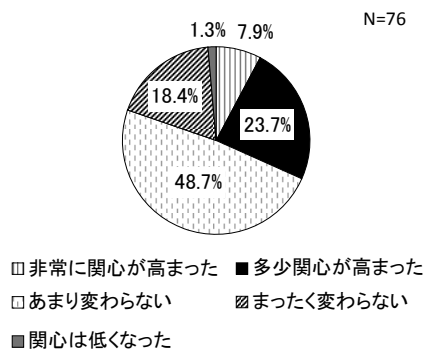


図2 町並みに対する関心の変化

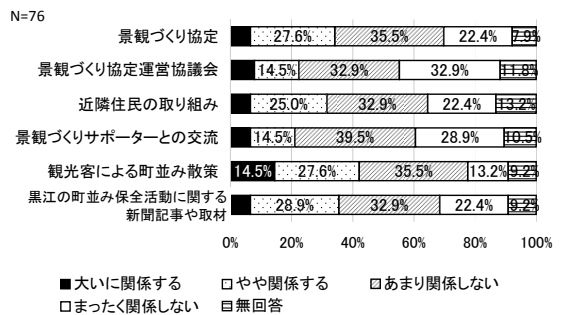


図3 町並みに対する関心に影響を与える要因

町並みに対する関心に影響を与える要因については、「景観づくり協定」や「運営協議会」が関係する（「大いに関係する」および「やや関係する」とする回答者はそれぞれ、2割から3割強にとどまる。「景観づくりサポーターとの交流」についても「運営協議会」と同じく、関係するとの回答は2割程度である[図3]。

一方で、「観光客による町並み散策」が関係するとする回答は4割を超えている。観光客に次いで関心要因として高いのは「黒江の町並み景観保全活動に関する新聞記事や取材」であり、4割近くを占める。

協議会やサポーターの存在・活動それ自体よりも、観光客の増加やメディアの注目といった、まちづくり活動における成果の顕在化・社会的認知が住民の意識に強く作用してきたことを示唆している。アンケートに記載された以下のような悲観的・諦観的な意識[表3]が普通に見られる中で、これを変化させるには成果の実感をもっとも効果的であると言うことであろう。

表3 住民アンケートの自由意見

・皆さんの言う町並みの対象建物部分に住んでいる人達の意見が無視されている。この部分は現在風に生活できる水準にない。町並み景観の保存拡大は若い人の居住を縮小し、地域を衰退させる。地域の町並みはある時代の産業を取り残しているなのでその産業が衰退すれば町並みだけを維持して行くのはむずかしい。(年齢性別無回答)

・進んでいる地域で空家も多く、取り組んでいる事は良いことだとは思いますが、住民の間に実際何も浸透していないように思えます(取組をされている方のみ浮いているのでは?...) (88才・性別無回答)

・今となつては古い建物もずいぶん減つてしまひ、地域の町づくりを考えると、もう遅いように思ひます。多くの観光地の古い残された町並みには、商売(おみやげ物やさんがたくさんあり、そういった物を目ざすのであれば、ちよつと違ふように思ひます)。津波等の防災面からもこの地域からの転居も考えています。もしかしたら、そういうお家も多いのではないかと思ひます。(年齢性別無回答)

表4 黒江の景観まちづくりの活動経過⁽¹⁰⁾

	まちづくりをめぐる取り組み	内容
2011年12月	「黒江の町並みを活かした景観づくり協定」締結	・「黒江の町並みを活かした景観づくり協定運営協議会」設置 ・「黒江の町並みを活かした景観づくりサポーター制度」制定
2012年1月	「歴史を活かしたまちづくりシンポジウム」の開催	・協定が締結されたことを記念して、黒江コミュニティセンターにて開催された。 ・250人を超える人が、海南市内にとどまらず県内外から集まった。 ・この場でサポーターの募集が大々的に行われた。
3月	まちなみ点検	・まずは、自分たちが居住している地域の現状を知ろうとの目的で実施された。 ・活動には同協定の運営協議会のメンバー、建築士ら約20人が参加。 ・4、5人ずつの班に分かれ、デジタルカメラで写真を撮りながら地図を見ながら町内を回った。調査は建築士のアドバイスを受けながら、建物の歴史や構造、損傷の程度、見た目が黒江らしい落ち着いた景観に合っているかなどをメモしていった。
6月	雑賀崎・田野・和歌浦地区景観まちづくりワークショップin黒江	・雑賀崎・田野・和歌浦地区景観まちづくりを考える市民の会(主催:和歌山市)が、地域でのルールづくりや活動の場づくりについての先進例として黒江の現地視察に訪れ、学習会が開催された。
10月	高山市からの視察団との交流	・とりわけ「サポーター制度」への高い関心を持って、「高山市景観町並保存連合会」(35名)が黒江の視察に訪れ、町歩きの後、協議会と意見交換の場ももたれた。
11月	まちなかに「くろめ鉢」の設置	・漆を攪拌するために用いられていた鉢(くろめ鉢)をオブジェとして活用し、黒江のまちを特徴づける軒先の三角形の空間に12個を設置。鉢の中には、花や植物が飾られた。 ・くろめ鉢は「景観づくりに活用してほしい」と、地元漆店が直径0.8メートル、1.2メートル、1.7メートルの3サイズ12個を提供。 ・この活動に先立ち、「くろめ鉢プレゼント大作戦」と名打って、鉢を設置してくれる地域住民を、事前に、回覧およびブログにて募集した。 ・この活動を見て、自身の自宅前にも設置したいという地域住民も数名おり、後日設置した。
11月	「美し(うまし)近畿景観づくり活動賞」	・近畿の「美しい風景」(美しい風景)を支える住民等の優れた活動を表彰することにより、景観に対する理解と意識の向上を図り、新たな活動の促進に資することを目的とするもの。
2013年2月	「ゆめづくりまちづくり賞」(国土交通省・近畿地方整備局主催)奨励賞を受賞	・関西の元気で先進的なまちづくりや地域づくりに励む個人や団体、行政を募集し、特に優れたものを表彰するもの。まちづくり活動の輪を県内や県外に広めたことが高く評価された。 ・とりわけ、地元以外からも参加出来るサポーター制度を導入したことは高く評価された。
2月	「黒江の路地の軒下蚤」が市スタート	・毎月第4日曜日、黒江ぬりもの館の前で開催される骨董一。 ・サポーターの1人が主催。 ・市の開催や出店者の募集は、適宜ブログで行っている。
7月	「おもてなしベンチ」を設置	・海南ロータリークラブ(60周年記念事業)と協働した取り組み。 ・黒江の魅力向上を目的にまちなかに設置。 ・ベンチは、地域住民とサポーターがともに参加して、自分たちで組み立てた。 ・設置に際しては、協議会の会長が中心となって、地域住民に設置の許可を得た。
7月	提灯を設置	・「紀州漆器の里 黒江」の文字入りの「提灯」(観光協会より50個贈呈)を、まちなかに25個を設置した。以前から設置していたものについて、痛みの激しい提灯の交換と観光ルートを中心に新規に設置した。 ・ベンチの設置と同様に、協議会会長が中心となって、地域住民に設置の許可を得た。
8月	第1回「黒江アーカイブプロジェクト」	・黒江に関する写真や資料をデジタルデータとして残し、公開し、未来へと繋げていく「黒江アーカイブプロジェクト」の第1回目の企画として開催。 ・語り手は、地元漆問屋の経営者。
9月	まちなかに「くろめ鉢」を設置(第2回)	・平成24年11月に開催されたものの第2弾。
12月	第1回黒江まちかどクラシック・クリスマスコンサート	・漆を保管していた漆工場にて、この年より毎年12月に開催。 ・旧工場の利用に際して、掃除や会場設営など、多くの地元住民とサポーターが集まった。 ・県内外から奏者を招き開催された。 ・漆の精製に使われた道具の展示と、大正～昭和時代の黒江の写真展も同工場内で開催された。 ・海南市の補助金(3か年)を活用した取り組み。
2014年2月	「地域再生大賞」優秀賞(地方新聞社・共同通信社主催)を受賞	・深刻化する地域の疲弊に挑む団体にエールを送ろうと、地方新聞社と共同通信社が2010年度に設けたもの。各社が各都道府県から原則として1団体ずつ計50団体を推薦し、専門家をつくる選考委員会審査にあたる。
7月	黒江をあらためて語り部さんと歩こう会	・サポーターの有志数名が企画。語り部をしている地元住民の話を聞きながら、改めて黒江の町並みを散策し、町の魅力を発見する取り組み。 ・協議会メンバー、サポーター、地元住民が参加した。
9月	第2回「黒江アーカイブプロジェクト」	・黒江に関する写真や資料をデジタルデータとして残し、公開し、未来へと繋げていく「黒江アーカイブプロジェクト」の第2回目の企画として開催。
12月	第2回黒江まちかどクラシック・クリスマスコンサート開催	・会場となる煉瓦堂には、フードコーナー、カフェ&日本酒バー、紀州漆器展示即売会がオープン。 ・会場周辺では「アート体験」(有料)、「黒江ぬりもの館」の向かいで「軒下蚤の市」、「くろめ鉢スタンプラリー」、「黒江ぬりもの館」で「落語会」が開催された。 ・「うるわし館」から黒江煉瓦堂までの道しるべとなる手作り行燈のまちなか装飾「黒江行燈プロジェクト」が行われた。
2月	サポーターへの再登録依頼	・協議会の結成から3年が経過する中、サポーターへの連絡体制が十分に機能していなかったことから、サポーターに対して、登録の継続意図を確認した。 ・依頼文は、各サポーターに郵送にて配布されたが、同時にブログでも再登録を呼びかけた。
7月	平成27年度「黒江の町並みを活かした景観づくり協定」運営協議会総会	・サポーターには「サポーター証」が交付された。 ・サポーターの再登録作業を経て、再登録したサポーターは40名(13名は登録を更新しなかった)。 ・当日は、総会のあとに、サポーターと協議会メンバーとの懇親会が開催された。
12月	第3回黒江まちかどクラシック・クリスマスコンサート	

5. 黒江の景観まちづくりに対するサポーターの意識調査結果と考察

では、居住者ではない立場から黒江の景観まちづくりに関わるサポーターは、どのような思いや立場で活動に関わってきたのだろうか。筆者がサポーターを対象に実施したアンケートにもとづいて、黒江の景観まちづくりに対する彼らの立場や思いを明らかにする。

1) サポーターの特徴

アンケートに回答したサポーターの属性として、年齢、性別、職業、居住地域を確認しておく。性別は、男性が7割強を占める[表5]。年齢は、男性は50代、60代が多い[表5]。職業は、自営業がもっとも多い。居住地域は、海南市内（協定区域以外の）が半数を占め、一人を除けば全員が県内居住者である[表6]。この点から言えば、サポーターの圧倒的多くは、海南市民として、また和歌山県民として黒江に対して一定の地域アイデンティティを持つ存在であることがわかる。

表5 回答者の性別および年齢

	男		女		計	
20代	2	7.7%	1	12.5%	3	8.8%
30代	2	7.7%	1	12.5%	3	8.8%
40代	4	15.4%	2	25.0%	6	17.6%
50代	8	30.8%	1	12.5%	9	26.5%
60代	7	26.9%	1	12.5%	8	23.5%
70代	1	3.8%	2	25.0%	3	8.8%
80代	1	3.8%	0	0.0%	1	2.9%
無回答	1	3.8%	0	0.0%	1	2.9%
計	26	100.0%	8	100.0%	34	100.0%

表6 回答者の職業および居住地

		男		女		計	
職業	会社員	8	30.8%	1	12.5%	9	26.5%
	公務員	4	15.4%	1	12.5%	5	14.7%
	自営業	8	30.8%	3	37.5%	11	32.4%
	学生	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	無職	5	19.2%	2	25.0%	6	17.6%
	その他	0	0.0%	1	12.5%	2	5.9%
	無回答	1	3.8%	0	0.0%	1	2.9%
計	26	100.0%	8	100.0%	34	100.0%	

		男		女		計	
居住地	海南市内	13	50.0%	5	62.5%	18	52.9%
	和歌山県内	12	46.2%	3	37.5%	15	44.1%
	県外	1	3.8%	0	0.0%	1	2.9%
計	26	100.0%	8	100.0%	34	100.0%	

黒江以外の地域でのまちづくり活動への参加経験を聞いたところ、半数近くが「経験がある」と回答しているように[表7]、他地域でのまちづくりに

も参加した、まちづくりに対する意識の高い人たちから構成されている可能性を物語る。経験者の活動内容は、多岐にわたるが、イベント等を主催したりリーダー的な経験を持つ者もいる[表8]。

表7 まちづくり活動への参加経験の有無

	%	度数
経験がある	44.1%	15
ない	52.9%	18
無回答	2.9%	1
計	100.0%	34

表8 これまでに経験したまちづくり活動の内容

主なまちづくり活動一覧
まちづくり会社に勤務した経験
平成20年10月に海南市のまちづくりイベント事業「内海にぎわい祭り」の主催者として参加
公務員の業務として、また、建築士会として活動
民家や町家を残す会に入っている
県内外の町並見学、講演会の開催、よさこいボランティアスタッフ等
海南市内のイベント活動(ひな巡り、漆器deグルメ、〇〇パブリックビューイング等)
黒江の町並みを歩いた
市・県の主催するツアー関係のもの
景観保全・地域振興
温故知新の会、和歌山県自治体問題研究所まちづくり部会、中心市街地活性化のために活動した(元気市in海南)
地域総合型スポーツクラブ、まつり 真国芸術の郷 Kプロジェクト
黒江まちなみ再生計画(20年程前)
イベント企画
丘の町美瑛: 函館、小樽等のまちづくり・人づくり
紀州海南ひなめぐり実行委員会

2) サポーター登録の背景と動機

黒江と自身との関わりについては「友人・知人が暮らしている」がもっとも多い[表9]。「その他」の回答は、「仕事で関わった・お世話になった」、「海南市の語り部である」、「町並みに興味がある」、「友人(先輩)が活動している」などである。県民・市民としてだけではなく、サポーターの多くにとって、黒江は人間関係という点でも身近な場所であることが伺える。

表9 自身と黒江との関わり

	%	度数
現在暮らしている (協定区域ではない黒江地区)	14.7%	5
職場がある	2.9%	1
以前、暮らしていた	14.7%	5
知人・友人が暮らしている	35.3%	12
その他	29.4%	10
無回答	2.9%	1
計	100.0%	34

サポーター登録の動機は「黒江の町並みを残した

いと思ったから」がもっとも多く、黒江の町並みに対する彼らの強い思いが感じられる [表10]。また、まちづくりや景観に対する関心も高く、前述の指摘が裏付けられている。

表10 サポーター登録の動機

	%	度数
黒江の町並みを残したいと思ったから	76.5%	26
面白そうだから	5.9%	2
自分の得意分野を活かせると思ったから	17.6%	6
地域社会に貢献したいと思ったから	32.4%	11
やりがい・生きがいになりそうだから	2.9%	1
人と交流する機会が増えそうだから	5.9%	2
まちづくりに興味・関心があるから	35.3%	12
景観に興味・関心があるから	32.4%	11
黒江の人びとの力になりたいと思ったから	20.6%	7
その他	2.9%	1
計	232.4%	79

注: %は回答者数34名に対する割合として算出

3) 黒江の町並みおよびまちづくりに対する意識

黒江の町並みの魅力度については、「大変魅力的」「まあまあ魅力的」が半数以上を占める [表11]。

一方で、黒江に住んでみたいかという問に対しては、約半数が「あまり思わない」もしくは「思わない」と回答した [表12]。「その他」は、「協定区域のすぐ近くに自宅があるから」、「家を何軒か持つことが可能であればその一つとして」といった回答である。

黒江の町並みを残したいと考えるサポーターが大半であるものの、こうした思いと、黒江に住む場所として希望するかどうかは別物であることがうかがえる。おそらくは少なくないサポーターにとって、黒江がすでに日常生活圏かそれに近い圏域に含まれる地域であること、また「住む」ということの現実的な諸困難を考慮すると当然の結果と言えよう。

表11 黒江の町並みの魅力度

	%	度数
大変魅力的である	23.5%	8
まあまあ魅力的である	41.2%	14
どちらとも言えない	20.6%	7
あまり魅力的でない	11.8%	4
まったく魅力的でない	2.9%	1
計	100.0%	34

表12 黒江は住んでみたいまちであるか

	%	度数
強くそう思う	0.0%	0
そう思う	30.0%	9
あまり思わない	36.7%	11
思わない	13.3%	4
その他	10.0%	3
無回答	10.0%	3
計	100.0%	30

注: 協定区域ではないが、黒江地区に住む4名のサポーターは除いた

黒江でまちづくりを進めていく上で、もっとも大切だと考える資源については「歴史的町並み」とする回答がもっとも多い [表13]。次いで多いのは「黒江の人」である。黒江の魅力は、なによりも黒江の町並みにあると考えられている。

表13 まちづくりを進める上で最も大切な資源

	%	度数
漆器産業の地として栄えた歴史	17.6%	6
歴史的町並み	29.4%	10
紀州漆器・漆器産業	14.7%	5
黒江の人	20.6%	7
無回答	2.9%	1
無効回答	14.7%	5
計	100.0%	34

景観まちづくりへの自身の関わり方については、「町並み景観保全活動への参加」や「まちづくり勉強会への参加」「地域住民との交流」といった回答が多く、景観まちづくりの直接の担い手として関わりたいというサポーターの思いが現れている [表14]。

表14 サポーターとして取り組みたい活動

	%	度数
地域行事・イベントへの参加(観客として)	47.1%	16
地域行事・イベントへの参加(スタッフとして)	35.3%	12
ぬりもの館(町家カフェ)のスタッフ	11.8%	4
語り部ボランティア	11.8%	4
町並み景観の保全活動への参加	64.7%	22
まちづくり勉強会への参加	52.9%	18
地域住民との交流	41.2%	14
自身の得意分野を活かした活動	26.5%	9
寄付による支援	11.8%	4
無回答	2.9%	1
計	305.9%	104

注: %は回答者数33名に対する割合として算出

以上のように、サポーターは黒江の町並みを保全してことを強く希望しており、これを実現すべく、積極的に活動に参画したい意思を持っていることが伺えた。

以下では、アンケートでサポーターから寄せられた自由意見をもとに、黒江の景観まちづくりのあり

方に対するサポーターの思いをより詳しく見ていく。

先に示した住民アンケートでは、黒江を来訪者が訪れる場所として展開していくことに消極的な住民の意見がみられた。これに対して、サポーターらの意見をみると、集客と一体的に町並み保全を進めていくべきという意見が目立つ〔表15〕。重伝建の選定に向けた市と地元の取り組みが必要という意見もあり、住民の景観まちづくりに対する意識とは温度差があることがうかがえる。

続いて、景観まちづくりに対する住民の意識や関わりについて〔表16〕は、住民の興味・関心が薄いとといった意見（A、B）や、地元が黒江のまちをどのようにしたいのか、住民の思いや将来ビジョンが見えないといった意見（C、D、H）、関係者の合意形成や総意が必要であるといった意見（E、F）、地域住民やサポーターが一体となって取り組むことが必要であるといった意見（C、D、G）が見られる。一方で、サポーターとしての自身の役割は、地域をひとつにまとめあげるために行動で示すことという強い使命感を持っている様子も見受けられる（G）。

黒江がどのようなまちづくりを目指しているのかという点に思いを巡らせている点からは、地域住民の主体性を尊重し、それをサポートしていきたいという思いを感じとることができる。

最後に、サポーター制度に対する意見としては、現状はその意味・意義がよくわからないとする中で、サポーターをどのように活かすか、協議会の手腕に期待を寄せる意見や、地域の外に開かれたまちづくりのかたちを実現するしくみとして、サポーター制度を評価する意見が見られる〔表17〕。

表15 町並みの保全・活用に対する意見

集客への活用
<p>・集客のための1つの手段として活かしていくべき。海南駅から黒江までゆっくり歩けるルートが必要だと思います。(20代・女性)</p> <p>・若者があそびにきたくなるような街づくり古き良き街なみはのこし、商業施設ができるといいと思います。(40代・女性)</p>
漆器産業との関わり重視
<p>・町並みを大切にしていくことで、漆器の地として栄えた歴史、産業を活かした取り組みができる(湯浅町のように)。(50代・男性)</p> <p>・紀州漆器の歴史がわかる様な町並み工房等の整備。うるわし館内に歴史や漆器行程が常時見られ受け答え対応できる様な整備と人材育成。現状は塗師が多いが木地師から一連の作業の出来る職人や工房の整備。(60代・男性) ※一部抜粋</p>
その他
<p>・重伝建の選定にむけた市と地元の取り組みが必要。(50代・男性)</p> <p>・訪れる人の目にふれることが大切だと思います。歴史的町並みの中に人々の営みがあることも必要です。(50代・男性)</p>

表16 景観まちづくりの現状に対する認識

<p>A まだまだ地元の住人の意識が低いと感じます。住民がもっと興味と関心を持っていくことで少しずつでも変わっていくと思います。(30代・男性)</p>
<p>B まずは住民の意識レベルの向上から変われば自然と町並みは統一されてくると思います。黒江の地にはない特徴をアピールできれば、将来につなげられると思います。(40代・男性)</p>
<p>C 実際に住んでいる黒江の人々は黒江の町並みをどの様に思っているのでしょうか。地域住民とサポーターが一体となって取り組んで行くことが大切。(40代・男性)</p>
<p>D 黒江のまちづくりを行うにあたって、現段階で将来どのような「まち」にしたのかという目標がわかりにくいと思います。昔のように運河を作り、夜景を楽しめるようなまちにするのか、漆器を全国にアピールするようなまちにするのか、目標をしっかりと決め、みんなでその1つの目標に向かって活動していけたらと思います。(20代・女性)</p>
<p>E メインストリートの川端通りや入りくんだ路地の建物が老朽化し、また歯抜けの状態が目立っている。歴史的景観保存には一個人の問題としてではなく、地区住民の総意を要する。また行政としての支援が求められる。(70代・男性)</p>
<p>F 黒江在住の方が、まちづくりを心から望まれていることが条件になります。皆さんのコンセンサスが課題になると思います。(50代・男性)</p>
<p>G まちづくりは一部の人間では出来ません。サポーターを含め、そこに住む人々、各種団体がひとつにならなければ駄目だと考えます。まずは、地元の各種団体が折り合いをつけて、黒江のまちづくりをするんだという意気込みが大切です。その為には、しっかりと情報して参加できるところに参加して頂いて喜びを感じて頂く必要があります。そのような環境づくりをサポーターは行動で示して街づくりの人々(環境)育むべきだと考えます。(60代・男性) ※一部抜粋</p>
<p>H 黒江地区のサポーターの方から、よそ者の視線を感じる事があります。黒江のまちづくりは黒江住民の総意なのではないでしょうか？地区住民の方々の積極的な協力が必要だと思いますので、海南市は小さな町ですので、地区を問わず市民の皆様の理解と多勢の方々の協力がなければ成功は難しいと思いますので、まず、「まちづくりイベント事業」に参加した経験者の方々と横の繋がりを持ち、市民全体の活動に広げてゆければ強力な組織になるのではないかと考えます。黒江のまちづくりを基盤として町全体に活気が生まれることを期待します。(70代・女性) ※一部抜粋</p>

表17 サポーター制度に対する意見

・サポーター制度の意味・意義がまだもうひとつよくわかりません。サポーターが活躍かどうかはまず協議会側がどう対応をするにかかっているのかと思います。(50代・男性)

・今までは比較的地域内での研究、そして地域内だけでの活動と思われがちであったような気がします。海田市全体としてのとらえ方で活動していくことが望ましいです。そのような意味でもサポーター制度は、これから大きく展開してはけるものと考えます。(60代・男性)

以上のことから、彼らはなかば「外部」者の立場から、黒江のまちづくりの状況を客観的・俯瞰的にとらえており、地域住民の結束や地域住民自身におけるビジョンの共有の必要性が重要であると認識している。そして、こうした地域の状況を打開するための糸口として、サポーターが機能できることを望んでいることがうかがわれた。

6. まとめ

以下、黒江の景観まちづくりにおけるサポーターの意義と課題についてまとめる。

景観まちづくりサポーターを取り入れたことの意義は、第1に、景観まちづくりの初動期の推進力となった点である。行政主導の時期を経て、協定の締結を機に住民主体で始まった活動であるが、担い手が不足する中で、サポーターの存在はスピード感を持って活動を進める上で、重要な役割を果たしたといえる。このことは単に、活動を計画通りに進めていくという点だけでなく、活動が目に見えて進展することで、景観まちづくりに対する住民意識に少なからず影響を及ぼしたという点において、重要であったといえる。

ただし、黒江の場合は、こうした効果は協議会やサポーターの活動から直接に地域住民に作用するよりも、協議会の景観まちづくり活動を通じて訪れた来訪者（散策客）やメディアを通じて、間接的に触発を受けていった側面が大きいといえる。いかに、主体的・先進的な活動であったとしても、広く住民意識を変化させていくためには、その成果が実際に目に見える形で確認されることの重要性を指摘することができる。したがって、サポーターと連携しながら、この点につながる活動を強化していくことが当面の大きな課題となる。

第2に、黒江の町並みの保全や修景は容易ではないものの、景観まちづくりの組織化とそれによる活動を通じて、景観保全に対する意識はそれ以前に比べて高まっている。サポーターがとくに歴史的町並みや町並み景観の保全活動に高い関心を持った人々を中心に構成されていることは、今後もこの傾向に直接・間接に小さくない影響を与えていることになるだろう。この点にこそ、サポーター制度の基本的な意義を見いだすことができるし、協議会の活動を媒介にして地域住民とサポーターが交流し、連携する場のさらなる創出が重要である。

居住者と地域外支援者、それぞれの立場の違いから生じるまちづくりの方向性に対する考え方の違いを克服していくためには、この部面での地道な活動がその鍵を握っている。

【注】

- (1) 本稿では、地域外支援者を、当該地域を支援する居住者以外の人々と位置づけている。これには、例えば、ふるさと納税制度や各種オーナー制度などを介して当該地域を支援する人々も含まれるととらえている。そして、サポーター（制度）とは、地域外支援の一つのかたちであり、上記に例示したものに比べて、より直接的で主体的な支援のあり方として位置づけている。
- (2) 調査区域に限定した公式の人口統計はないため、世帯数はアンケート配布時に現地目視により確認した。人口は、2010年10月の国勢調査における黒江地区の人口・世帯数から世帯数あたりの人員を求め、それを調査区域に当てはめ算出。
- (3) 南ノ浜地区には2つの国の登録有形文化財があり、西ノ浜地区には、紀州連子とのこぎり歯状の家並みが残る。
- (4) 協定運営協議会会長（当時）へのヒアリング（2012年9月1日実施）による。
- (5) 「住民や事業者が相互に結んだ地域の景観づくりのルールに関する協定を、知事が認定し、公表することにより住民参画の景観づくりを促進することを目的とした制度である。
- (6) 紀州漆器協同組合従業員へのヒアリングによ

- る（2016年6月22日実施）。
- (7) 前掲(6)と同じ。
- (8) 運営協議会会長（当時）および海南市役所職員へのヒアリング（2012年9月1日実施）による。
- (9) 委員は、公募制や推薦制ではなく、会長からの直接依頼による。発足当時の構成メンバーは、40～80代で、女性は1人。15名のうち、3名は協定締結地区の住民ではないが、そのうち2名は、それぞれ、協定締結エリア内にあるうるわし館（紀州漆器伝統産業会館）、ぬりもの館の関係者である。
- (10) 協議会の活動への参与観察、協議会ブログ「黒江の町並み景観便り」をもとに筆者が作成した。

【引用・参考文献】

- 1) 敷田麻実・末永聡、2003、「地域の沿岸域管理を実現するためのモデルに関する研究—京都府網野町琴引浜のケーススタディからの提案」、『日本沿岸域学会論文集』第15号、日本沿岸域学会、pp.25-36
- 2) 敷田麻実、2005、「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」『江渟の久爾』第50号、江沼地方史研究会、pp.74-85.
- 3) 森重昌之、2009、「地域主導の観光を通じた「より開かれた共同体」の形成」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』第8号、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院、pp.49-65.
- 4) 森重昌之、2010、「観光まちづくりにおける地域外関係者の受け入れのしくみとその特徴」『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』第6号、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集制作委員会、pp.105-116.
- 5) 森重昌之2015、「定義から見た観光まちづくり研究の現状と課題」、『阪南論集.人文・自然科学編』第50巻2号、阪南大学学会、pp.21-37.
- 6) 前掲4) p.110.
- 7) 敷田麻実、2009、「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』第9号、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院、p.100.
- 8) 黒江の町並み景観便り、<http://syun0510.ikora.tv/>（最終閲覧日2016年10月9日）
- 9) 財団法人電源地域振興センター、1997、「海南市黒江街並み整備事業基本構想」
- 10) 財団法人電源地域振興センター、1984、「「海南市黒江街並み整備事業」調査報告書」

（受稿 平成28年10月19日，受理 平成28年11月24日）